

# コンスタンヌス二世のシチリア進出

——七世紀中盤のビザンツ帝国と中部地中海——

小 林 功

## はじめに

皇帝コンスタンヌスが、自ら宮廷に選んだシチリア島のシラクサで殺された。トロイロスの子のアンドレアスが皇帝とともに浴場へ向かった。皇帝の身体を洗っている最中、彼は皇帝の頭に石鹸の泡を浴びせ、皇帝が目が開けられないようにした。それから彼は皇帝の前に置いてあった銀の桶をとり、それを皇帝の頭につけて、頭蓋骨を叩き割った。すぐに浴場から飛び出したため、誰も彼を捕えることができなかった。人々は皇帝を宮殿に戻したが、皇帝は二日後に息を引き取った<sup>①</sup>。

これは、七世紀中盤のビザンツ皇帝コンスタンヌス二世（在位六四一—六六八年）の最期を伝える資料の一つ、テル・マーレの偽

ディオニュシオスの記述である。ビザンツ帝国の皇帝が暗殺などで非業の最期を遂げる例は枚挙にいとまがなく、このコンスタンヌス二世の暗殺も驚くべき事件とは言えない。

だが、この記述にはきわめて特異なことが書かれている。コンスタンヌス二世が首都のコンスタンティノープルから遠く離れたシチリア島のシラクサに滞在しているのみならず、その地に宮廷をも設けていることである。五世紀以降コンスタンヌス二世の時代まで、ビザンツ帝国の皇帝のなかでコンスタンティノープルあるいはその近郊以外で没した皇帝はいない。さらに同じく五世紀以降、末期を除くとイタリア半島以西を訪れたビザンツ皇帝は、彼と息子のコンスタンティノス四世（在位六六八—六八五年）しかない。さらに言うならばシチリア島自体、六世紀のユスティニアヌス一世（在位五二七—五六五年）時代の再征服によって獲得され

た、いわば新領土である。これらから、コンスタンス二世がシラクサで暗殺されたということがいかに異例なことであるか理解できるだろう。

だが、コンスタンス二世のシチリア進出に関する研究は少ない。そうした研究では、当時イタリア半島で勢力を拡大しつつあったランゴバルド人や、エジプトを制圧してさらにカルタゴを中心とする北アフリカ方面へ圧力を強めつつあったアラブ人の脅威に対抗すべく、西方領域へ皇帝自ら赴いたと論じられることが多い<sup>②</sup>。だが、こうした説明は概説的説明に留まっていると言わざるを得ず、帝国をとりまく状況がきわめて苦しい中、皇帝自ら西方に進出した理由を十分には説明できていない。

それゆえ本稿では、コンスタンス二世の西方への進出に関して検討を行い、以下の点について説明していきたい。第一に、コンスタンス二世がシチリア島に移動することを決めたのはどの時点であるのか。後述するように、コンスタンス二世はシチリアに入るまでに約三年という長期間を要している。コンスタンス二世が当初移動の目的としていた場所がどこだったのかについては検討が必要である。第二に、シチリア島でコンスタンス二世が何をを行い、また何を行おうとしていたのか検討していく必要性がある。そして最後に、コンスタンス二世がシチリアで行ったことは、ど

のように後代に受け継がれていったのか考えるべきだろう。こうした検討によって、従来のビザンツ帝国史研究では看過されがちであった、七世紀以降の帝国の西方領域、特にシチリア島を中心とする中部地中海周辺領域の持つていた意義の一端を解明していくことが可能になる。

最後に、利用する資料に関しても簡単に触れておきたい。コンスタンス二世の時代は、ビザンツ史の中でも特に資料が少ない時期である。ギリシア語資料は、アラブの勃興する直前までは同時代資料が存在するものの、コンスタンス二世時代に関しては九世紀初頭の『テオファネス年代記』を利用するしかない<sup>③</sup>。

ギリシア語資料が不十分であるため、ムスリム(イスラム教徒)側の資料をも積極的に利用する必要がある<sup>④</sup>。特に北アフリカの状況に関してはムスリム資料にほぼ全面的に依存することになる。だがムスリム資料も九世紀以降に成立したものであり、また本稿で扱う七世紀の記述に関しては混乱が多い。

これらのほかには、最初に引用したテル・マールレの偽ディオニシオスなどの、シリア系資料が活用できる。これらは八世紀のエテッサのテオフィロスの記述を比較的忠実に受け継いでいて資料の価値は高い<sup>⑤</sup>。また『教皇の書』などのラテン語資料も活用できるが、これらは全体的にコンスタンス二世を敵視した記述を行

ついで。

⑨ 文書資料が不十分なため、考古学資料は重要である。本稿では文書資料の分析を中心とし、考古学の成果も念頭に置いた分析を行っている。

① Dionysius of Tel-Mahre, *Secular History*, in: A. Palmer (tr.), *The Seventh Century in the West-Syrian Chronicles*, Liverpool, 1993 (以下、DTMと略), pp. 85-221, p.193.

② cf. J.F. Haldon, *Byzantium in the Seventh Century: the Transformation of a Culture*, Cambridge, 1997<sup>2</sup>, pp. 59-61.; A.N. Stratros, *Byzantium in the Seventh Century III: 642-668*, Amsterdam, 1975 (以下、Stratosと略), pp. 198-202.; W. Treadgold, *A History of the Byzantine State and Society*, Stanford, 1997, pp. 318-319.

③ Theophanes Confessor, *Chronographia*, Leipzig, 1883-5. (以下、Theoph.と略) 同じく九世紀初頭に成立したニケフォロスの『簡約歴史』は、コンスタンヌス二世に関する記述がほぼ欠落している。Nicephorus, *Breviarium Historiarum*, Washington D.C., 1990.

④ *The History of al-Tabari*, 39 vols, Albany. (以下、Tabariと略); al-Baladhuri, Ph.K. Hitti (tr.), *The Origins of the Islamic State (Kitab Futh al-Buldan)*, Beirut, 1966. (以下、Baladhuriと略) 北マフリカに関するムスリム資料の成立はさらに遅くなる。cf. 余部福三「イフリキーヤにおけるアラブの定着とヘルベルの抵抗運動」『人文自然科学論集(東京経済大学)』一〇四、一九九七年、四一―七六頁。

⑤ テル・マールレの偽ディオニュシオスの他に、シリアのミカエルやレゴリー・アブル・ファラージュ、マンビジュのアガビウスの年代記が現存している。ただしアガビウスはアラビア語で書かれている。

J.-B. Chabot (tr.), *Chronique de Michel le Srien II*, Paris, 1901. (以下、Misと略); E.A.W. Budge (tr.), *The Chronography of Gregory Abul Faraj: The son of Aaron, the Hebrew Physician commonly known as Bar Hebraeus*, Oxford, 1932. (以下、Bar Hebraeusと略); Agapius (Mahboub) de Menbidj, *Kitab al-Urun 2-II*, PO VIII-3, Turnhout, 1971. (以下、Agapiusと略) 下記の参考文献を参照してください。A. Palmer, op.cit., pp. 85-104.; L.I. Conrad, "The Conquest of Arwad: A Source-Critical Study in the Historiography of the Early medieval Near East", in: Av. Cameron & L.I. Conrad (eds), *The Byzantine and Early Islamic Near East I: Problems in the Literary Source Material*, Princeton, 1992, pp. 317-401.

⑥ *Le Liber Pontificalis I*, Paris, 1981. (以下、LPと略); *Pauli Historia Langobardorum*, MGH SRG, Hannover, 1878. (以下、Paulusと略); Agnellus von Ravenna, *Liber Pontificalis*, Freiburg, 1996. (以下、Agnellusと略)

## 二 コンスタンヌス二世の時代

六三〇年代にシリアに侵入してきたアラブは瞬く間にシリアのほぼ全域を制圧し、ビザンツ帝国の支配領域はアンティオキア北方からユーフラテス川上流域にまで後退した<sup>①</sup>。アラブは続けてエジプトへの本格的な侵攻を開始する。エジプトの中心であるアレクサンドリアは六四一年に降伏し、他のエジプト全域も急速にアラブの支配下に入った<sup>②</sup>。ビザンツ帝国は六四五年に艦隊をエジブ

トに送り、一時的にアレクサンドリアとその周辺の奪回に成功するが、翌六四六年には撃退される。こうしてビザンツ帝国はエジプトを永久に喪失した。<sup>③</sup>コンスタンヌス二世時代、六四〇年代に入るとアラブ軍は毎年のように小アジアの内陸部に侵入を繰り返すようになり、小アジアは経済的にも大きな打撃を受けた。

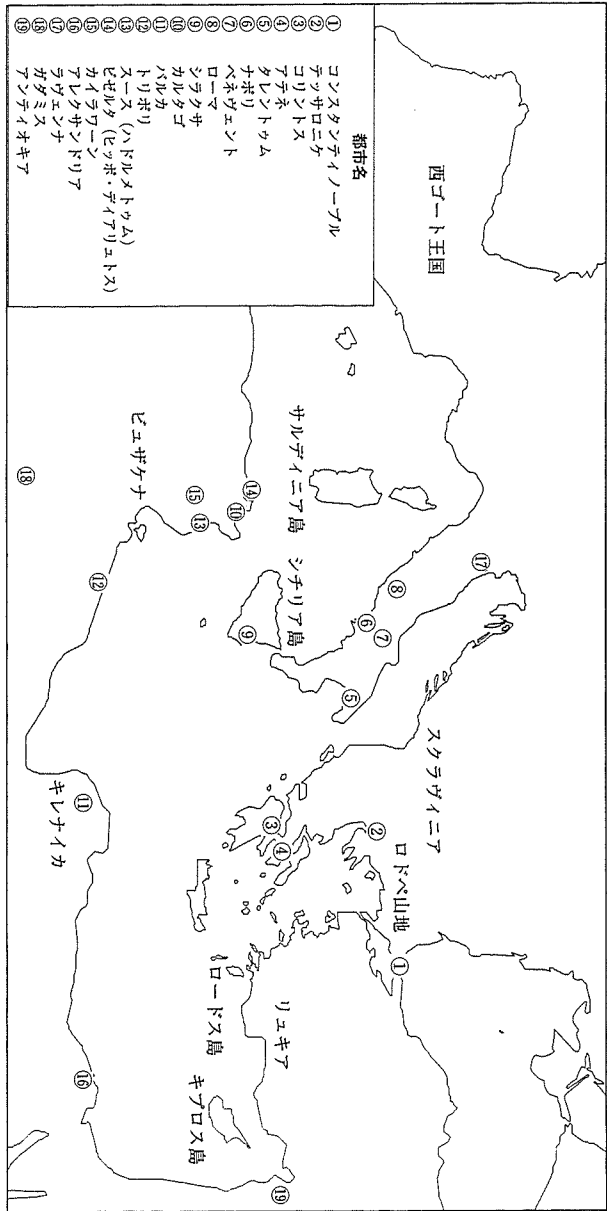
祖父のヘラクレイオス（在位六一〇—六四一年）と同様、コンスタンヌス二世も自ら軍勢を率いて外敵と戦った。彼が最初の遠征先として選んだのはアルメニアで、六五一—二年にアルメニアに進出してこの地域での親ビザンツ勢力の維持を図った。だがこの遠征は失敗に終わり、アルメニアはすぐにアラブの宗主権を受け入れた。<sup>④</sup>

しかしながらアルメニアにおける勢力後退を最後として、小アジア方面におけるビザンツ帝国とアラブとの戦況は膠着状態に陥る。これは小アジア内陸部の防衛システムが有効に機能し始めた結果と考えることが可能である。六四〇年代以降小アジアにおいてアラブ軍は恒久的な領域獲得をほとんど成功させることができなくなっていた。その結果アラブの対ビザンツ戦略も修正を余儀なくされる。すなわちシリア総督として対ビザンツ戦の中核を担っていたムアーウィアが艦隊を新設して地中海に進出するのである。

当初、地中海でアラブは圧倒的に有力なビザンツ艦隊に挑戦しようとはせず、沿岸部の防備強化という戦略を選択していた。<sup>⑤</sup>しかしムアーウィアにとって、シリアやエジプトの沿岸部で活動するビザンツ帝国の艦船は重大な脅威であった。先述した六四五—六年のビザンツ艦隊のエジプト上陸も、アラブが地中海に艦隊を持っていなかったため可能だった。一〇世紀のアラブの歴史家であるアル・タバリによると、ムアーウィアは「信徒たちの指導者よ、シリアの住民たちはローマ人たちの犬の鳴き声や雄鳥の鳴き声を聞いて過ごしております。なぜなら、彼らはヒムス地方（シリア中部）の海岸の目の前にまで迫っているからであります」と述べて、カリフに繰り返して海軍設置の許可を求めている。<sup>⑦</sup>

カリフの許可のおりた六四九年、ムアーウィア率いるアラブ艦隊はキプロス島を攻撃して大きな戦果を収めた。<sup>⑧</sup>これを契機としてアラブ艦隊の地中海進出が本格化する。これに対して六五五年、コンスタンヌス二世は自ら艦隊を率いて小アジア南岸、リュキア沖でアラブ艦隊と戦ったが敗北した。<sup>⑨</sup>

だが六五〇年代末に入るとアラブではカリフ位をめぐってムアーウィアとアリーとが対立する。ムアーウィアは後方の安全を確立するためにコンスタンヌス二世と和平を結んだ。<sup>⑩</sup>その結果アラブとの戦線は一時的に安定し、コンスタンヌス二世が関心を帝国の



西方の領域へと向けていくことが可能になった。  
 コンスタンティノープルの後背地であるバルカン半島では、ス  
 ラヴ人の活動が活発化していた。スラヴ人はアジア系の遊牧民族  
 であるアヴァール人とともに六世紀後半からバルカン半島に侵入

を開始していた。アヴァール人は六二六年のコンスタンティノー  
 プルの包囲失敗によって大きな打撃を受け、パンノニア平原へ退  
 去した<sup>⑩</sup>。しかしその結果をれまでアヴァール人の配下にいたスラ  
 ヴ人が行動の自由を獲得し、バルカン半島のほぼ全域に定住した。

かくしてバルカン半島の大半の地域にビザンツ帝国の効果的な支配が及ばなくなり、バルカン半島はスクラヴィニア(「スラヴ人の土地」)と呼ばれるようになる。

コンスタンズ二世は六五八年にスクラヴィニア遠征を行った。<sup>⑩</sup>

この遠征はコンスタンティノープルに直接脅威を与える存在である、ロドペ山地一帯のスラヴ人の集団を支配下に入れて、コンスタンティノープルへの背後からの脅威の軽減が主目的だったと考えられる。また別稿で指摘したように、捕虜としたスラヴ人を小アジアに移住させて、アラブ軍の侵入によって減少した人口の補填をも行っている。<sup>⑪</sup>

六世紀のユスティニアヌス一世時代の再征服によって獲得された領域—イペリア半島南東部、イタリア、そして北アフリカ—においても、ビザンツ帝国の影響力は後退しつつあった。イペリア半島南東部のビザンツ領は七世紀の早い時期に西ゴート王国に奪回されている。<sup>⑫</sup> イタリア半島では既に六世紀後半からランゴバルド人のイタリア半島侵入によってビザンツ帝国の支配は大きく動揺していた。

イタリアのビザンツ支配領域内でも帝国の支配は動揺していた。六四八年にコンスタンズ二世が発布した単意論支持の勅令「テュポス」はローマ教会の激しい反発を引き起こし、コンスタンズ二

世は教皇マルティヌスを逮捕・追放しなければならなかった。<sup>⑬</sup> またイタリア北部のラヴェンナにいた総督の統制力が不安定だったのみならず、六五三年には総督のオリンピオスが突然軍勢を率いて南イタリアに進軍している。この行動については、反乱を起こしたと見なす見解が有力である。<sup>⑭</sup>

カルタゴを中心とする北アフリカは、ヘラクレイオスの父親がカルタゴ総督を務めるなど、コンスタンズ二世やヘラクレイオスの一族にとっては関係の深い地域であった。コンスタンズ二世の治世初期にカルタゴ総督を務めていたのも一族のグレゴリオスである。<sup>⑮</sup> だが六四〇年代に入ると、エジプトから西進してくるアラブ軍が現実の脅威となっていた。さらに北アフリカ内陸部に居住する原住民のベルベル人との関係も不安定であった。

以上要するに、コンスタンズ二世時代のビザンツ帝国はバルカン半島のスラヴ人やイタリア半島のランゴバルド人など、四周の脅威に対応していかなければならなかった。特に小アジア半島と北アフリカへ侵入を繰り返すアラブは最大の脅威であった。コンスタンズ二世はこれら周囲の脅威に対抗して、領域の東西で戦う必要に迫られていた。

⑩ cf. W. E. Kaegi, *Byzantium and the Islamic Conquests*, Cambridge, 1992.

- ② R.H. Charles (tr.), *The Chronicle of John* (c. 690. AD.), *Coptic Bishop of Nikiu*, London, 1916, pp. 179-201.: L. Caetani, *Annali dell'Isiam*, Milano, (西暦 Caetani ㄷㄷ) IV, 1911, pp. 235-277, 279-299.
- ③ Caetani VII, 1914, pp. 103-105.
- ④ R. Bedosian (tr.), *Sabos' History*, New York, 1985 (Downloaded from <http://www.fordham.edu/halsall/sbook.html>), ch. 35.: cf. Theoph. p. 344.
- ⑤ cf. R.-J. Lilje, *Die byzantinische Reaktion auf die Ausbreitung der Araber: Studien zur Strukturwandlung des byzantinischen Staates im 7. und 8. Jahrhundert*, München, 1976.: id, "Araber und Themen. Zum Einfluß der arabischen Expansion auf die byzantinische Militärorganisation", in: Av.Cameron (ed), *The Byzantine and Early Islamic Near East III. States, Resources and Armies*, Princeton, 1995, S. 425-460.: Haldon, op.cit, pp. 208-253.: 中谷敏浩「トマスの総説——中世の東地中海——」『古代文化』四一 一八九九号 一—二二頁。
- ⑥ M.A. Ageil, *Naval Policy and the rise of the fleet of Ufrigiyyah from the 1st to 3rd Centuries A.H. (7th to 9th Centuries A.D.)*, Ph.D. thesis, The University of Michigan, 1985 (西暦 Caetani ㄷㄷ), pp. 16-27.
- ⑦ Tabari vol. 15, 1990, p. 26.
- ⑧ Theoph. pp.343-344, Tabari vol. 15, pp.26-31, Baladhuri pp.235-236, DTM pp.173-177, MiS pp.441-442, Bar Hebraeus p. 98, Agapinus p. 220.: Caetani VII, pp. 222-231.
- ⑨ Theoph. pp. 345-346, Tabari vol.15, pp. 74-77, DTM pp.179-180, MiS pp.445-446, Bar Hebraeus pp.98-99, Agapinus p. 224.: Caetani

VIII, pp. 92-103.: cf Ageil, pp. 30-31.

- ⑩ A. Kaplony, *Konstantinopel und Damaskus: Gesandtschaften und Verträge zwischen Kaisern und Kalifen 639-750*, Berlin, 1996, S. 33-46.
- ⑪ *Chronicon Paschale*, Bonn, 1832, pp.716-725, Theoph. pp. 315-316.: J.V.A. Fine, Jr., *The Early Medieval Balkans: A Critical Survey from the Sixth to the Late Tenth Century*, Ann Arbor, 1983, pp. 42-43, J.D. Howard-Johnston, "The siege of Constantinople in 626", in: C. Mango & G. Dagron (eds), *Constantinople and its Hinterland*, Aldershot, 1995, pp. 131-142.
- ⑫ Theoph. p. 347.
- ⑬ H. Ditten, *Ethnische Verschiebungen zwischen der Balkanhalbinsel und Kleinasien von Ende des 6. bis zur zweiten Hälfte des 9. Jahrhunderts*, Berlin, 1993, S. 209-215.: 熊澤「トマノキロキ」冊の技術的トマノキロキの政治——大規模移動のトマノキロキ——『西洋古学』一八一 一八九六年 一—二六頁。
- ⑭ cf. L.A. Garcia Moreno, "The Creation of Byzantium's Spanish Province. Causes and Propaganda", *Byzantion* 66 (1996), pp. 101-119.
- ⑮ LP p. 338.
- ⑯ LP p. 338.: Stratos pp.104-111, W.E. Kaegi Jr., *Byzantine Military Unrest 471-843: an Interpretation*, Amsterdam, 1981, pp. 163-164.
- ⑰ ナコトキロキのトマノキロキの移動は、中世のトマノキロキの移動のトマノキロキの移動である。

### 三 コンスタンヌス二世とシチリア

#### (1) 移動の目的地

コンスタンヌス二世は六六一年にコンスタンティノーブルを出發した。そしてテッサロニケとアテネ、コリントスに比較的長期にわたって滞在した後、六六三年にコリントス近郊からアドリア海を渡り、イタリア半島南部のタレントウムに上陸した。皇帝は続けてイタリア半島南部におけるランゴバルド勢力の中心であるベネヴェントを包囲したが、その攻略には失敗した。コンスタンヌス二世はナポリを経て六六三年六月にローマに入り、ローマ教皇ウイタリアヌスと会見している。コンスタンヌス二世はすぐにナポリに戻り、さらにイタリア半島を南下してシチリア島に渡り、シラクサに入った<sup>①</sup>。そして六六八年に暗殺されるまで、シラクサに滞在するのである。

コンスタンヌス二世のシラクサ滞在の理由については古くから人々の関心を惹いてきた。『テオファネス年代記』によると、コンスタンヌス二世はローマに首都を移そうと考えていたという。またテル・マールレの偽ディオニュシオスなどのシリア系資料でもコンスタンヌス二世がローマに遷都しようとしていたことを理由としてあげているが、さらにその背景として、彼が弟のテオドシオス

を殺したために軍隊、あるいは人々の支持を失ったことを挙げてゐる。そしてローマからシラクサへの移動に関しては、「ローマに皇帝が住むのは不都合です。この都市はアラブから遠く離れているからです。」という反対の声が上がったため、コンスタンヌス二世はローマを去ってシラクサに入ったと報告している<sup>②</sup>。

しかしこの説明を信用することはできない。なぜなら第一に、先述したようにコンスタンヌス二世は単意論を批判したローマ教皇マルティヌスを更迭・流刑に処するなどしていた。そのためイタリア方面ではコンスタンヌス二世に対する評価はコンスタンティノーブル以上に厳しかったと考えられる。第二に、コンスタンヌス二世はローマにはわずか二日間しか滞在しておらず、本気でローマに遷都しようとしていたとは考えにくい。またローマへの遷都と軍らの不支持との間に関連性を見いだすこともできない。

西方におけるコンスタンヌス二世の行動を検討すると、以下の三つの特徴を確認できる。第一に先述したように、バルカン半島に比較的長期滞在していることである。第二に、それと比較するとイタリア本土での滞在期間が異様に短いことである。そして最後に、コンスタンヌス二世が上陸したのがイタリア半島の最南端に近いタレントウムである点である。

当時のイタリア半島におけるビザンツ帝国の支配の中心はラヴ



エンナであった。そしてラヴェンナに近接するポー川流域こそがランゴバルド人の拠点であった。事実コンスタンス二世がイタリア半島に上陸した頃、ランゴバルド王のグリモアルドゥスは軍勢をポー川の北岸に集結させている。これはストラトスが示唆しているように、コンスタンス二世がラヴェンナ近郊に上陸するとグリモアルドゥスが予想していたからだろう。<sup>⑤</sup>

コンスタンス二世がイタリアに上陸させた兵力は約二万と考えられる。この数は破格に大きなものであった。<sup>⑥</sup>にもかかわらず、コンスタンス二世はその兵力を対ランゴバルド戦ではほとんど利用していない。ベネヴェントでの包囲戦でも、攻撃が長期化する兆しが見えるとすぐに作戦を変更してナポリへ移動している。ブルガレッラの示唆しているように、コンスタンス二世はイタリア本土では軍事力の消耗を避け、兵力を温存させたままシチリア島にわたっていることが看取できる。<sup>⑦</sup>すなわちコンスタンス二世が動員した大兵力は対ランゴバルド戦のために展開されたのではなく、その兵力を維持したまま、シチリア島にわたることが重要だった。コンスタンス二世の目的は対ランゴバルド戦争ではなかった。そしてコンスタンス二世の目的が対ランゴバルド戦でないなら、ランゴバルド勢力に南北から脅かされているローマへの遷都が目的であったとは考えにくい。コンスタンス二世は、最初から

シチリアへの移動を念頭に置いていたのである。

ここからイタリア本土におけるコンスタンス二世の特徴的な行動の背景も明らかとなる。ランゴバルド王国と正面から対立するイタリア北部に上陸することはあり得ない。またベネヴェント公国が南イタリアで活発な行動を続けていた場合には、シチリア島が帝国東部から遮断されて孤立してしまう可能性があり、シチリア島への移動に危険が伴う。それゆえ皇帝は南イタリアに上陸して、ベネヴェント公国の活動を牽制した。だが、軍事力に打撃を受けてまで、ベネヴェント攻略を強行する必要性はなかった。通説ではしばしば言われているような、イタリア半島における支配の再確立は、皇帝の頭の中にはなかった。

この際無視できないのがナポリである。ナポリはイタリアにおけるコンスタンス二世の活動の拠点となっており、またコンスタンス二世の滞在した六六三年頃からナポリにおける貨幣鑄造が開始されている。<sup>⑧</sup>これは南イタリアにおいてコンスタンス二世がナポリを重視していたことを示すものと言えよう。

コンスタンス二世がナポリを重視した背景にはいくつかの理由が想起できる。第一に経済的な理由である。ナポリの位置するカンパニア地方にはさほど面積は広くないものの、肥沃な平野が広がっている。加えてナポリは七世紀中盤の段階でも帝国の東方領

域との強固な経済上のつながりを有しており、シチリア島や北アフリカとの経済的なつながりをも有していたことが発掘結果などから看取できる。第二に、この地域には六世紀末以降、イタリアの北中部から元老院貴族階層が数多く移住してきていた。彼らはコンスタンティノープルの宮廷とも密接なつながりを持っていた人物たちだったから、イタリア半島において彼らの支持を獲得し、彼らの安全を保障することはコンスタンヌス二世にとっても有益だったろう。⑩そして第三に、ナポリがベネヴェントに比較的近く、ベネヴェント公国の活動を牽制するための戦略的拠点として重視された可能性が高い。

バルカン半島におけるコンスタンヌス二世の比較的長期にわたる滞在の要因も、同様の文脈から解釈できる。コンスタンヌス二世の滞在了たテッサロニケ、アテネ、コリントスはコンスタンティノープルから南イタリア・シチリア島に向かう際の中継点となる都市である。先述したようにバルカン半島の大半にはスラヴ人が定着しており、これらの都市も彼らの脅威を受けていた。コンスタンヌス二世がスラヴ人の脅威を排除してこれらの都市の支配を再強化したことは確実であるが、それはしばしば論じられるようにこれらの地域、特にアッティカ地方をテマとして再編するためであったとは考えられない。⑪コンスタンヌス二世はテッサロニケやア

テネ、コリントスに長期にわたって滞在しているものの、これらの都市外に出て軍事行動を行ったことが看取できない。むしろコンスタンヌス二世はこれらの都市それ自体の支配を強化して、帝国の東西の連絡路を確保することを目指していたと考えるほうが理にかなっている。特にコリントスの場合、六世紀末以来繰り返してスラヴ人の攻撃を受けていた。⑫また地理的にも、コリントスはイタリアとコンスタンティノープル・小アジアとを結ぶ海上ルート的重要な中継拠点である。コンスタンヌス二世もおそらくコリントス近郊から船に乗ってイタリア半島へ向かっている。コリントスの支配強化はコンスタンヌス二世にとっては無視できぬ重要な意味を持っていたといえよう。コリントスからは、おそらくコンスタンヌス二世を称賛している碑文が出土している。これはコリントスの確保・安定をコンスタンヌス二世が重視し、そのための方策を実行したことを示唆している。⑬

以上要するに、コンスタンヌス二世の西方への移動の目的地は当初からシチリア島にあったのであり、資料が言及しているようなローマへの遷都にはなかつたし、しばしば論じられるようにイタリア半島での勢力回復もコンスタンヌス二世の目的ではなかつた。シチリア島に到着するまでのコンスタンヌス二世の行動は、全てシチリア島に渡るための慎重な準備のために展開された

作戦だったのである。

## (2) 移動の目的

では、なぜコンスタンス二世はシチリア島へ移動したのか。

第一の要因として、経済的理由があげられる。シチリア島は古くから農業の盛んな地域で、七世紀においてもシチリアの農業生産は活発だった。『ラヴェンナ大司教の書』によると、七世紀中盤においてシチリア島にあるラヴェンナ大司教の所領だけで、毎年一五〇〇ソリドゥスが帝国に収められていたという。シチリア島にはこのほかにローマ教皇の所領なども存在していたから、シチリア全島から帝国に収められる収入は莫大なものだったろう<sup>⑮</sup>。当時帝国は前代までの税収の中核であったシリア・エジプトを失っていたから、シチリア島からの収入は大きな意味を持っていた。七世紀後半にはシラクサから発掘された貨幣の量がコンスタンティノープルでの貨幣出土量を上回っている<sup>⑯</sup>。ここからも、七世紀のビザンツ帝国の経済においてシチリア島の持つ意味が大きかったことが看取できる。さらにナポリと同様、東西交易の中継点としての地位も無視できない重みをもっていた<sup>⑰</sup>。

第二に、政治的側面を挙げることができる。シチリア島は回復当初からイタリア本土とは異なる行政区画を形成した。すなわち

シチリア島は統合された五三七年以来、事実上皇帝直轄属州としてプラエトルが統治を行っていた<sup>⑱</sup>。この体制は七世紀末にシチリアがテマに再編されるまで存続したと考えられる。すなわちシチリアは政治的には他のイタリア地域と異なった行政区を形成していた。また六世紀末以来、ランゴバルド人などの侵入で混乱の続くイタリア本土から、多くの元老院階層の人々が流入してきていた<sup>⑲</sup>。もちろんランゴバルド人の進出の影響を受けていなかったことも無視できない。要するに七世紀のシチリア島は帝国中央との連絡が密接で、古来からの支配秩序がなお強固に存続していた。

コンスタンス二世の時代になると、シチリアと帝国中央との結びつきはさらに強化されていく。その一例として貨幣の鑄造を挙げることができる。七世紀初頭まで、貨幣の鑄造は帝国各地で行われていたが、ヘラクレイオス時代の六二八／九年頃貨幣鑄造地が急減し、東方ではコンスタンティノープルとアレクサンドリア、西方ではラヴェンナとローマに局限された。しかしながら六三〇年代後半からコンスタンティノープルでシチリア島向けの貨幣が鑄造されるようになっていく。さらにコンスタンス二世時代に入るとすぐに、六四一年からシラクサで貨幣鑄造が開始される<sup>⑳</sup>。これはシチリア島の経済的意味の大きさをゆえであろうが、同時にコンスタンス二世の治世初頭から既に、シラクサが帝国の西方領域

の政治的・経済的な中核都市として重視されつつあったことをも示している。

一方、それに対してイタリア本土を統括するラヴェンナ総督の政治的権威は、ランゴバルド勢力の軍事的攻勢や統括区域内の自立化傾向、そして先に紹介した宗教問題などによって着実に後退しつつあった<sup>⑧</sup>。その結果、帝国の西方領域におけるシラクサ、そしてシチリア島の政治的地位は上昇しつつあったのである。

『教皇の書』によると、

そして(コンスタンス二世は)第七インディクチオ(六六二/三年)にシチリア島に渡ってシラクサ市に居住し、持たぬ者であれ持つ者であれ、カラブリア、シチリア、アフリカ、そしてサルデニアの人々に対して、何年もの間人頭税や艦隊税(nauticatio)などの税金——そのような税はそれまで課されたことがなかった——によって、妻たちが夫たちから、また子供たちが親たちから離されるがごとき苦しみを与えた。さらにその他の、何者であれ生きていく希望をなくしてしまふような、尋常でない苦しみが課された<sup>⑨</sup>。

とあって、アフリカ・サルデニア・シチリア・カラブリアで課税の強化を行ったことが確認できる。しかしラヴェンナなどを中心とするイタリア北中部に課税強化が行われたことは看取できな

い。これは、後述するようにこの課税強化がアラブとの戦いに備えるために行われたため、アラブの脅威を直接受ける地域に限定して課税されたからと考えられる。しかしながら同時に、既にコンスタンス二世がイタリアの北・中部と、南部のカラブリア・シチリアとを別個の行政区画として捉えていたことをも示唆している。

シチリアは六世紀以来イタリア本土とは別個の行政区を形成していたが、カラブリアはコンスタンス二世の時代まではラヴェンナ総督の管轄下にあった。だがコンスタンス二世はシチリアに入る前にベネヴェント公国の活動の牽制やナポリの地位強化など、南イタリアでいくつかの施策を行っている。これは先述したように、シチリアを帝国の中央部から孤立させないための政策だった。そしてシチリア島と帝国中央部との連絡を維持するためには、南イタリアとシチリアが密接に連絡できる態勢が必要とされただろう。それゆえコンスタンス二世の移動を契機として、南イタリアは従来の行政区画から分離され、特にカラブリアはシチリアと結びつく傾向を示しはじめたと考えられる。この動きは七世紀末のテマ・シチリアの成立という形で完結する。シラクサ——シチリア島は、六世紀の再征服以来帝国の西方領域の中核であったラヴェンナ——イタリア北部、そしてカルタゴ——北アフリカとなら

ぶ重要な位置を占めるようになったのである。

だが最も重要なのは軍事的な要因である。シチリア島は地中海のほぼ中央部、イタリア半島と北アフリカによって地中海がもつとも狭まる地点に位置している。つまりシチリア島は地中海の東西海上交通を扼する重要な戦略的地点に位置していると同時に、北アフリカのビザンツ領を後方から支援するために最適の位置にある。コンスタンス二世が西方に展開した兵力は対ランゴバルド戦目的ではなかった。そして兵力を温存したままシチリア島に移動させたことを考えると、コンスタンス二世がシチリアに渡った最大の要因が北アフリカに迫るアラブに対抗するためであることは疑いない。

ここでコンスタンス二世時代の北アフリカの状況に関して概観を行っておきたい。

六四六年にカルタゴ総督のグレゴリオスは反乱を起こして北アフリカで皇帝位を僭称した。その結果北アフリカは中央政府の統制から離脱した。<sup>②4</sup>

一方、北アフリカにはアラブの脅威も迫りつつあった。アラブはエジプトを征服した後、バルカを中心とするクレナイカ地方にまで支配領域を拡大していた。<sup>②5</sup>そして六四七年にはトリポリタニアに侵入する。グレゴリオスはこれを迎え撃つが敗死した。だが

アラブはトリポリタニアを支配下に入れることなくバルカに撤退した。<sup>②6</sup>これ以降アラブの北アフリカ進出は一時沈静化する。

アル・ヌワイリなどによると、グレゴリオスの敗死後、北アフリカにはジェナハ（ゲンナディオス？）なる人物が派遣されたが、アラブに寝返った。だが北アフリカはエラティリオン（エレウテリオス？）なる人物のもと、統制を回復したという。<sup>②7</sup>他には何の資料もないためにこの資料の信憑性に関しては判定のしようがないが、少なくともコンスタンス二世がシラクサに入るまでに北アフリカの統制が回復されたことは確実である。これは先述したようにコンスタンス二世が北アフリカに課税を行っていることから看取できる。

コンスタンス二世がシチリア島に移動してきたのとはほぼ同時期から、北アフリカにおけるアラブの活動も再び活発になっていく。六六五年に、ムアーウィア・イブン・アビー・フダイジュの率いる約一万のアラブ軍が北アフリカに侵入した。六六五年のアラブ軍の北アフリカ侵入に関して報告を行っているのはアラブ系資料のみである。アル・ヌワイリなどによると、アラブ軍は沿岸部を西進してスース、ジャルラを攻撃した。これに対してコンスタンス二世はニケフォロスなる人物が率いる軍勢を北アフリカに派遣した。しかしニケフォロスはスースでのアラブ軍との小競り合

いに敗れ、そのままシチリアに退却した。アラブ軍はさらに北上して、ビゼルトまで到達した。<sup>②③</sup>

この六六五年の遠征の際にもアラブ軍は東方へ撤退している。

だがこれまでの遠征の際とは異なって、新たにトリポリに駐留軍を置くようになった。六六〇年代後半になると、北アフリカにおけるアラブの勢力圏はトリポリからガダミスを結ぶ線まで前進した。トリポリを中心とするトリポリタリアがアラブの支配下に入ったことによって、未だビザンツ帝国の支配下にあったビュザケナ地方（チュニジア南部）はアラブの支配地と隣接することになり、これまで以上にアラブの強力な圧力にさらされるようになったのである。<sup>②④</sup>

アラブは六七〇年代に本格化する北アフリカ攻略へ向けての準備と、シチリア島まで進出してきたコンスタンス二世とビザンツ軍を牽制するために、兵力を展開したと考えられる。<sup>②⑤</sup>一方ビザンツ帝国側の対応は不可解である。すなわちニケフォロスが派遣されたにも関わらずアラブ軍との直接対決を避けて、早々に撤退するのである。

ニケフォロスの行動に関してはいくつかの解釈がある。ストラスはスース近郊での敗北を要因としてあげているが、この時遭遇したアラブ軍はイブン・フダイジュ率いるアラブ軍の主力では

なく、比較的小規模な部隊だった。先述したようにシチリア島には対アラブ戦のためはかなり大規模な陸上兵力が移動してきており、アラブの小部隊との小競り合いに一回敗れた程度で北アフリカへの兵力派遣をあきらめるとは考えにくい。それゆえスースでの敗北をとりあげるだけでは不十分である。<sup>②⑥</sup>

ターハーは、コンスタンス二世が北アフリカでの課税を強化したために、北アフリカの状況が悪化していたことを挙げている。<sup>②⑦</sup>確かにアラブ資料などから、コンスタンス二世の課税策が北アフリカの住民に不満を引き起こしていた可能性が看取できる。<sup>②⑧</sup>しかしながら住民の不満と、シチリアから送られてきた遠征軍の動向とを安易に結びつけることには賛成できない。

一方アゲイルは、チュニジア近海にエジプトから派遣されたアラブ艦隊が接近していたため、ニケフォロスがアラブ艦隊を回避した可能性を指摘している。アラブ資料には六六四年にアラブ艦隊がシチリアを攻撃しているとあることも、アラブが海陸から北アフリカに西進してきたことを示唆している。<sup>②⑨</sup>

これまで分析してきたように、コンスタンス二世はシチリア島に大規模な軍勢力を率いて来ているが、その主力は陸上兵力であった。艦隊は、コンスタンティノープルからギリシア、そしてギリシアから南イタリアへ渡るときの移動手段として活用されてい

るが、軍事力として活用されていたとは言い難く、さらに艦隊がシチリア島まで従っていたとは考えにくい。おそらくエーゲ海・東部地中海方面へ帰還したと考えられる。六六〇年代初頭までシチリア島では平和が続いており、ランゴバルド勢力も海を越えてシチリア島に攻撃を行おうとはしなかった。従ってシチリア島に陸上兵力のみならず艦船も十分に展開されていたとは考えにくい。すなわちコンスタンス二世が上陸した時点のシチリア島に、アラブ艦隊に対抗できるだけの艦隊が存在していた可能性はきわめて低い。ストラトスはシチリア島に強力がビザンツ艦隊が存在していたと考えて、六六四年のアラブ艦隊のシチリア攻撃を否定している。だがこの見解を首肯することはできない。

先述したように、コンスタンス二世がシチリアに入ってから課税の強化を行ったことが確認できる。この資料の報告では特に、コンスタンス二世の課税強化の中心として艦隊税が挙げられていることに注目したい。この税金の賦課されている地域は、北アフリカ・中部地中海に進出してくるアラブ軍の脅威を受ける地域に限定されている。シチリア島は七世紀末にテマに再編されるが、テマ・シチリアには艦隊が付属して、中部地中海方面で活動するアラブ艦隊に対抗していた。シチリア島におけるビザンツ艦隊が本格的に設置された時期をコンスタンス二世の滞在時期におくこ

とは合理的である。コンスタンス二世は、中部地中海に進出してくるアラブ艦隊に対抗し、さらに北アフリカに陸上兵力を送り込むために、シチリア島を拠点とする艦隊の創設に努めたのである。しかし艦隊を新たに創設することは容易なことではなかった。

イブン・ハルドゥーンによると、「この敗北（グレゴリオスの敗北）の後、フランク人とローマ人はムスリム（イスラム教徒）が侵入して攻撃を続けている間は要塞に避難するようになり、ムスリムは無抵抗の村落部を駆け巡り、荒廃させることに専念していた」<sup>⑧</sup>。この報告は、ビザンツ帝国がグレゴリオスの敗北後、北アフリカに十分な陸上兵力を供給することができていなかったことを示している。コンスタンス二世はシチリア島まで連れてきた陸上兵力のほとんどを、本来の目的地である北アフリカへ派遣できないでいた。これはすなわちシチリア島の陸上兵力を北アフリカへ移動させるための艦隊が準備できていなかったことを示している。

六六五年のアラブ軍の北アフリカ侵入の段階で、コンスタンス二世によるシチリア艦隊創設はまだ不十分なものに留まっていた。それゆえニケフォロスが優勢なアラブ艦隊との直接対決を回避したのである。また艦隊が不十分なレベルに留まっていた以上、ニケフォロスの率いていた軍事力それ自体もイブン・フダイジュの

一万の軍勢に対抗できる規模だったとは考えにくい。<sup>⑧</sup> スースでのアラブの分遣隊に対する敗北の要因も、ニケフォロスの率いていた軍勢が数的に劣勢だったことから説明できる。ニケフォロスの行動に際してのアゲイルの指摘は正鵠を得たものだった。シチリア島での艦隊の創設はコンスタンズ二世の治世には完成しなかったのである。

本節での検討を総括しておきたい。イタリヤ半島とは異なつてシチリア島では長期の平和が続いており、経済的にも重要な意味をもった地域であった。ギリシアや南イタリヤにおける作戦によつて帝国中央部との連絡路を確保した後、コンスタンズ二世はシチリア島に渡る。皇帝自らがシチリア島に渡り、南イタリヤをもシチリアから統括するようになったことにより、帝国の西方領域の中でシチリア島の占める政治的地位も上昇した。こうした展開は七世紀末のテマ・シチリアの成立で完結する。コンスタンズ二世はシチリア島に大規模な陸上兵力を移動させたが、これは北アフリカへの圧力を強めていたアラブ勢力に対抗するための軍事力であった。また皇帝はシチリア島で新たに艦隊を創設した。これは北アフリカに陸上兵力を投入するためのみならず、中部地中海方面への進出を開始していたアラブ艦隊に対抗するために強化された政策であった。こうした施策によつて、シチリア島は北アフ

リカのビザンツ領を後方から支援する基地としての意味、さらには中部地中海におけるビザンツ艦隊の拠点としての意味を付加された。しかしシチリア島における艦隊創設は長期の時間を要し、コンスタンズ二世の治世には大きな効果を発揮することができなかったのである。

- ① Theoph. p. 348, DTM pp.187-188, MiS p. 446, Bar Hebraeus p.99, LP pp.343-344, Paulus, pp.186-191.  
 ② Theoph. p. 348, DTM pp.187-188, MiS p. 446, Bar Hebraeus p. 99. 反対した④は DTM p. 44 元老院議員 MiS と Bar Hebraeus p. 44 兵士たちとを言っている。

③ LP pp. 343-344.

④ Paulus p. 188.

⑤ Stratos p. 210.

⑥ 五三三年にヘリサリウスがアフリカを制圧したときの兵力が一万八千、五五二年にナルセスがイタリヤに展開した兵力が三万であった。  
 T.S. Brown, *Gentlemen and Officers: Imperial Administration and Aristocratic Power in Byzantine Italy 554-800*, London, 1984 (以下、Brown 以降), p. 84.

⑦ F. Burgarella, "Bisanzio in Sicilia e nell'Italia Meridionale: I Re-fessi Politici", in: A. Guillou & F. Burgarella, *L'Italia Bizantina: Dall'esarato di Ravenna al tema di Sicilia*, Torino, 1988, pp. 251-352, p. 299.

⑧ Ph. Grierson, *Byzantine Coins*, London, 1982, pp. 143-144; M.F. Hendy, *Studies in the Byzantine Monetary Economy c. 300-1450*, Cam-



bridge, 1985, p. 421.

- ⑥ P. Arthur, "Aspects of Byzantine Economy: an evaluation of Amphora Evidence from Italy", *BCH suppl.* 18 (1989), pp. 79-93.
- ⑦ Brown pp. 22-27.
- ⑧ Stratos, 206-208; W. Treadgold, op.cit., p. 315.
- ⑨ Fine, op.cit., pp. 59-62.; cf. G.I.D. Weinberg, "A Wandering Soldier's Grave in Corinth", *Hesperia* 43 (1974), pp. 512-521.
- ⑩ J.H. Kent, "A Byzantine Statue Base at Corinth", *Speculum* 25 (1950), pp. 544-546.
- ⑪ Agnellus p. 414.
- ⑫ cf. A. Guillou, "L'Italia Bizantina dall'Invasione Longobarda alla caduta di Ravenna", in: *Storia d'Italia vol. I: Longobardi e Bizantini*, Torino, 1980, pp.220-338, pp.311-314.
- ⑬ Grierson, op.cit., pp. 129-138.
- ⑭ P. Reynolds, *Trade in the Western Mediterranean, AD 400-700: The ceramic evidence*, Oxford, 1995, p.121.
- ⑮ Bugarella, op.cit., p. 258, A.H.M. Jones, *The Later Roman Empire 284-602*, Oxford, 1964, p. 283.
- ⑯ Brown pp. 27-28.
- ⑰ Grierson, op.cit., pp. 129-130, Hendy, op.cit., pp. 421-422.
- ⑱ Brown pp. 48-53.
- ⑲ LP p. 344.; cf. Paulus p. 191.
- ⑳ cf. Brown p. 13.
- ㉑ Theoph. p. 343, Ibn abd al-Hakam, *Conquista de Africa del Norte y de Espana* Valencia, 1966. (イハ' al-Hakam ヲ著) p. 21.
- ㉒ al-Hakam pp.18-20.; Caetani IV, pp. 532-536, VII, pp. 39-40.

㉓ al-Hakam pp.20-26, al-Nuwayri, *Conquête de l'Afrique Septentrionale par les Musulmans et Histoire de ce pays sous les Emirs Arabes*, in: Ibn Khaldoun, *Histoire des Berbères et des dynastie Musulmanes de l'Afrique Septentrionale*, Paris, 1925, pp. 313-447 (イハ' al-Nuwayri ヲ著), pp. 317-323.; Caetani VII, pp. 182-208.

- ㉔ al-Nuwayri pp. 324-325.
- ㉕ al-Nuwayri pp. 324-326.
- ㉖ Ageil pp. 64-65.
- ㉗ ibid., p.79.
- ㉘ Stratos, p. 224. 但しストラトスが「この時送られた兵力は少なかつた」云々の語句は、
- ㉙ A.Dh. Taha, *The Muslim Conquest and Settlement of North Africa and Spain*, London, 1989, pp. 59-60.
- ㉚ al-Nuwayri p. 324, Tabari vol. 15, pp. 23-24.
- ㉛ Ageil pp. 78-82.; Balachuri p. 375.
- ㉜ 後述するやうに六六九年、コンスタンティノス四世はシチリアに向かつてゐる。これは東方に艦隊主力が残っていたことを示しており、コンスタンス二世がイタリアへ渡るとき利用した艦隊は東方へ戻つたと考えられる。また六六四年以降アラブ艦隊が東部地中海方面に進出しており、東方の艦隊をシチリア方面へ残すことは不可能だつたらう。
- ㉝ ただし六五三年にアラブ艦隊がシチリア島を略奪した可能性がある。LP p. 338.
- ㉞ Stratos pp. 225-227.
- ㉟ Ibn Khaldoun, op.cit., p. 210.
- ㊱ ムスリム資料ではニケフォロスは三万の軍を率いていたとあるが、先述したやうにコンスタンス二世がシチリアに率いてきた軍勢が約二

万人であったことを考えると、この数字を信用することはできない。  
al-Nuwayri, p. 325.

#### 四 結びにかえて

##### ——コンスタンティノス四世の時代——

前章で検討した、シチリア島におけるコンスタンヌス二世の政策は、当時の帝国の状況を考えれば明らかに不可欠のものであった。だがこれらの施策は順調に進められたわけではない。艦隊設置などのために新たに付加された税は人々の不満を引き起こした。

最大の問題となったのは陸上兵力の不満であった。繰り返し述べてきているように、コンスタンヌス二世がシチリア島に率いてきた軍勢力は、北アフリカに迫るアラブの脅威に対抗すべく移動してきていた。だがシチリア島での艦隊の準備が迅速に進まなかったため、陸上兵力は北アフリカに本格的に移動することができず、シチリア島で無為に時間を浪費していた。こうした環境が兵たちに大きな不満を呼び起こした可能性はきわめて高い。小アジアの状況も、兵たちを焦燥させただろう。六六一年、内戦を克服してムアーウィアがアラブの全権を掌握した結果、小アジアへのアラブ軍の侵入が再度激化していた。<sup>①</sup>

六六八年六月、コンスタンヌス二世は暗殺された。コンスタンヌス

二世の暗殺計画を操っていたのはシチリア滞在の軍であった。コンスタンヌス二世の暗殺後、シチリアに移動してきていた皇帝直屬軍長官のミジジオス（ムゼズ）がシラクサで帝位を僭称している。<sup>②</sup>

だがミジジオスの反乱は長続きしなかった。『教皇の書』や『ランゴバルド史』によると、シラクサにはイタリア本土のイストリアやカンパニア、さらにカルタゴ総督管轄下のサルディニア島や北アフリカから反乱鎮圧軍が派遣された。<sup>③</sup> また一〇世紀の資料である『コンスタンティノール史蹟案内』によると、シチリアの艦隊はミジジオスを支持せずにシチリア島を離れ、東方へ向かって<sup>④</sup>いる。最終的にはミジジオスの反乱は六六九年に東方の艦隊を自ら率いてシチリアにやって来たコンスタンティノス四世によって鎮圧された。<sup>⑤</sup>

コンスタンティノス四世の時代はアラブとビザンツ帝国との対立が頂点に達した時期である。既に簡単に触れたように、六六二年以降アラブ軍は毎年のように小アジアに侵入し、小アジアでの越冬も繰り返されていた。<sup>⑥</sup> アラブ軍は六六九年にはコンスタンティノール対岸のカルケドンにまで到達する。<sup>⑦</sup> また六六四年以降アラブ艦隊も活動を活発化させており、六七〇年代に入るとアラブ艦隊はマルマラ海にまで侵入した。<sup>⑧</sup> そして六七四年から六七八年まで、第一次コンスタンティノール包囲が行われるのである。

—コンスタンティノス四世時代には中部地中海方面でもアラブの攻勢が本格化した。ウクバ・ブン・ナーフィー率いるアラブ軍は六六九年にビュザケナに侵入するとともに、艦隊がシチリア島をも攻撃している。<sup>⑨</sup>ウクバは六七〇年から、ビュザケナ内陸部にカイラワーン市の建設を開始する。<sup>⑩</sup>

前章で指摘したようにコンスタンス二世時代から、北アフリカのビザンツ勢力はアラブ軍の侵入時に主要な要塞都市などに後退する傾向があった。<sup>⑪</sup>またコンスタンス二世の意図にも関わらず、北アフリカには十分な陸上兵力を投入することができなかった。そしてコンスタンティノス四世の時代に入って、シチリアの陸上兵力が小アジアに帰還して北アフリカへの兵力補給が不可能となる。かくしてアラブがビュザケナ地方を獲得するにいたって、北アフリカでのビザンツ勢力は本格的後退を余儀なくされた。<sup>⑫</sup>

しかし北アフリカでのアラブの攻勢は、コンスタンス二世の施策が全く無意味だったことを示しているわけではない。六六九／六七〇年のウクバの遠征は、六六五年のイブン・フダイジュとは異なつて内陸部のルートを選択している。またカイラワーン市も内陸部につくられた。これはターハーやアゲイルが指摘しているように、ベルベル人に対する牽制の意味と同時に、ビザンツ艦隊の攻撃を避けるためだったと考えられる。<sup>⑬</sup>

こうしたアラブ軍の行動の変化が起きた原因は、中部地中海方面でのビザンツ艦隊の活動の活発化以外に考えられない。コンスタンス二世によってシチリア島に設置された艦隊が六六〇年代末、すなわちコンスタンス二世が暗殺されたのほぼ同時期から本格的な活動を開始したのである。

小アジア方面における対アラブ戦争が厳しさを増していた中、北アフリカに陸上兵力を振り向けることは不可能であった。だがビザンツ艦隊の活動によって、アフリカ沿岸部の要塞都市はシチリア島からの補給を受けることは可能になった。ビュザケナまで本格的に進出したアラブ軍を掃討することは不可能だったものの、コンスタンティノス四世時代にはビザンツ帝国は内陸部のベルベル人と連合してアラブ勢力の進出を食い止めることに一応成功した。その最大の成果は、六八三年のウクバ率いるアラブ軍の殲滅という形で現れる。この戦いでウクバを含むアラブ軍の大半が戦死し、アラブは一時カイラワーンを放棄してバルカまで撤退した。<sup>⑭</sup>またコンスタンティノス四世の没後になるが、六八八年にビザンツ艦隊はバルカを一時的に占拠し、北アフリカのアラブ軍を統括していたズハイル・ブン・カイス・アル・バラウィーを敗死させている。<sup>⑮</sup>

以上要するに、コンスタンティノス四世時代には北アフリカに

おけるビザンツ帝国の勢力は内陸部からは大きく後退した。しかしその反面、カルタゴを中心とする沿岸部の諸都市はシチリア艦隊の支援を受け、アラブに対して有効な抵抗を続けていた。

コンスタンス二世が意図したように、シチリア島は北アフリカを後方から支援する拠点であると同時に、中部地中海方面におけるビザンツ艦隊の拠点として最大限に機能していた。コンスタンティノス四世の時代、シチリア島におけるコンスタンス二世の政策は、完全な形ではないものの、ようやく花開いたのである。

このように短期的には、コンスタンス二世の政策はある程度の成果を挙げた。だが、七世紀末以降中部地中海の状況は大きく変化していく。その契機となったのは六九八年のカルタゴの最終的な陥落であった。カルタゴの陥落後、アラブはカルタゴ近郊のチュニスに港を造り、ここを拠点とする艦隊の活動を開始した。<sup>⑥</sup> さらに九世紀に入るとイフリーキヤのムスリムたちはさらに艦隊の活動を活発化させ、八二六年以降のシチリア島への侵攻・制圧へと結びついていく。このような状況下、中部地中海方面におけるビザンツ艦隊の活動やシチリア島の重要性はどのように展開していったのか。コンスタンス二世のシチリア島での政策の後代における継承・展開に関しては充分には検討することができなかった。八世紀以降の展開に関しては、別稿で検討を続けることとし

たい。

① 兵の一部が東方に戻った可能性もある。cf. Treadgold, op.cit., p. 320.

② Theoph. p. 352, DTM p. 193, MiS p. 451, Agapius p. 491, LP p. 346, Paulus p. 191. マクシモスの官職に関する Gregorius II Papa, *Epistolae et Canones*, PL 89, c. 498-534, c. 520, J. Guillard, "Aux origines de l'Iconoclasme: le témoignage de Grégoire II ?", *TM 3* (1968), pp. 243-307, p. 295; J.F. Haldon, *Byzantine Praelo-rans*, Bonn, 1984, p. 179, Kaegi, op.cit., pp. 165-166.

③ LP p. 346, Paulus p. 191.

④ Th. Preger (ed.), *Scriptores Originum Constantinopolitanarum*, Leipzig, 1901-1907, pp. 251-252.

⑤ Theoph. p. 352, DTM p. 193, MiS p. 451, Agapius p. 491.

⑥ Tabari vol. 18, 1987, p. 20.

⑦ *ibid.* p. 94.

⑧ *ibid.* p. 71.

⑨ Theoph. p. 352, DTM p. 194, MiS p. 454, Bar Hebraeus p. 101, Agapius p. 231, LP p. 346, Paulus p. 192, al-Hakam pp. 28-31, al-Nuwayri p. 327.

⑩ al-Hakam p. 31, al-Nuwayri pp. 327-330.

⑪ 既に六世紀以来、ビザンツ帝国は内陸部のムスリム人を服属させることに成功しづなかつた。cf. W.H.C. Fend, "The Christian Period in Mediterranean Africa c. AD 200 to 700", in: J.D. Fage (ed.), *The Cambridge History of Africa vol. 2: from c. 500 BC to AD 1050*, Cambridge, 1978, pp. 410-489, pp. 485-486.

⑳ ビュザケナへのアラブの進出に伴って、北アフリカ沿岸部と内陸部との交易ルートが寸断され、カルタゴなどのビザンチン支配下の諸都市の経済活動も急速に衰退した。H.R. Hurst & S.P. Roskams (eds), *Excavations at Carthage: The British Mission vol. I-1*, Sheffield, 1984, p. 47.

㉑ Taha, op.cit., p. 61, Ageil p. 68.

㉒ al-Hakam pp. 33-35, al-Nuwayri pp. 334-336.

㉓ al-Hakam pp. 38-39, al-Nuwayri pp. 337-338.

㉔ Theoph. p.370, al-Hakam p.40, al-Nuwayri pp. 339-343; Ageil pp. 101-109.

(本稿は、文部省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。)

(日本学術振興会特別研究員

